毎月二回（五日、二十日）發行
明治三十五年三月二十七日第三種郵便物認可
明治四十年八月廿五日發行

第六卷
第九號

目次概要

中古以後の佛國彫刻（上）　望二嶽野人
洋畫一般（三）　研究生
日本畫會瞥見（下）　匁卒生
紅兒會展覽會　あい生
博覽會の洋畫（五）　たにし
挿畫
博覽會出品
鑄銅『かめぷろ』　新海竹太郎作
『杉並木』　河合新藏筆
『東宮怨』　荻生守俊筆
『微笑』　大野靜方筆
『曙光』　都琴眞琴筆
小言　望雲
神話キューピッドとサイケ（一）　うしほ
華椿尺牘
時報

通卷
第百二十九號

小言

○美術審査委員會委員　博覽會の審査に關する紛紜より延て、第一回美術展覽會の開催に關しても、審査員の選任に關して諸種の云爲有之、建議、意見開陳、美術家の會見、美術團體の招集等事態極めて重く候ひしが、愈々其審査委員も決定して任命の發表を見候。今は只だ盛んに出品して、其第一回の展覽會を花々しく成功せしめんことを希望せずんばあらず候。

○審査委員の顔振れ　初めは主事として正木直彦氏之に當り、博覽會の審査員全部を之に當つるとのことに有之やに聞き及び候。然るに其後美術家團體の反對ありて既に決定せりと聞きつる發表の大に遲延するは何故ぞと、竊かに人をして怪訝の念に打たしめ候が、今其發表の後に於て之を檢するに異れりといはゞ異り居り候。今之を異る側より數へ候はんか。第一は博士諸氏が新たに加はりしことに候、第二は京都より加はりしことに候。第三は岡倉覺三氏及び其一派の人の加はりしことに候、第四は其他の人の加はりしことに候、更らに其人に就て數へ候はんか。實に左の如くに御座候。

第一（博士）	理學博士　松井直吉氏	工學博士　中澤岩太氏	
	醫學博士　森林太郎氏	文學博士　大塚保治氏	
	工學博士　塚本靖氏	文學博士　藤岡作太郎氏	
第二（京都）	中澤岩太氏	淺井忠氏	菊池芳文氏
	竹內栖鳳氏	今尾景年氏	山元春擧氏
第三（岡倉氏一派）	岡倉覺三氏	橫山大觀氏	新納忠之介氏
第四（其他）	高嶺秀夫氏	今泉雄作氏	橋本雅邦氏
	中川忠順氏	中村不折氏	大熊氏廣氏

以上二十名の新入を除けば、他の二十二名は凡て博覽會の審査員たりし人に候。即ち殆んど半分に近き人が新任せられて舊審査員と顔合せすることに御座候。而して其最も變化ありしは第一部の日本畫にして、舊八に對し、新十五の割合に候。其最も變化少かりしは第二部の洋畫にして、舊八に對して新五に候。第三部の彫刻は之が中間に位して、舊六に對し新四に御座候。以て其配合の苦心を見る可く候。即ち其異る側の試みにせし分類は此審査員選擇の特色を示すものにして、學者を入れ、京都を入れ、又一種人の目を側てしむる岡倉氏一派即ち舊美術院派の人々を入れしことは之が證左たる可く候。吾人は敢て之に就て論議せざる可く候。只其特色と數へしものゝ將來に於ける有りやうを窺はんが爲に、試みに特記し置く可く候。

○美術院派の勢力　吾人は敢て美術院を斥くるものにあらず、又之を歡ぶものにもあらず候。更らに恩怨なき吾人は之を深く神經にやむものにあらず候。然れども之を數字上より歷史的關係あるものを（今はよしなしとも）打算して日本畫に於て十五中八以上占むるを見ては、將來に其勢力の侮る可らざるものある可く存候兎んや其人物の活勢に富めるに於て更らに其感深かる可く候。然れども吾人は彼の保守一派の如く、之を毛嫌ひして反對の運動を以て對抗せんとするに贊するものには無之候。誠に是れ美事に候。寬濶能く容れて此展覽會を將來に成功せしむべきには候はずや。況んや未だ其生れ出でざるものには候はずや。（望雲）

鑄銅『ロプメカ』（博覽會二等賞牌）　新海竹太郎作